

海のアフタースクール

2015年 実施報告書
湘南学園小学校アフタースクール

After School in the Ocean
Implementation Report 2015
Shonan Gakuen Elementary After School





Program.01 ウォーターセーフティ	3
Program.02 オープンウォータースイミング	5
Program.03 シュノーケリング	7
Program.04 サーフィン 1	9
Program.05 サーフィン 2	11
Program.06 アウトリガーカヌー	13
Program.07 シーカヤック	15
Program.08 海とつながる里山	17
Program.09 釣り	19
さあ、海へ!	21

2015年7月から8月の夏期休暇中、湘南学園小学校アフタースクールにおいて『海のアフタースクール』事業を『日本財団 海の日サポートプログラム』助成により実施いたしました。

『海のアフタースクール』の目的と謝辞

母なる海。

まさに生命の揺りかごであり、生命が宿る地球というシステムを支えているのが海といえます。優しく、大きく包み込んでくれ、安らぎを与えてくれる海ですが、実際、海を目の当たりにすれば、優しいことはむしろ稀かもしれません。それでも、海は子どもたちを、強く、優しく、賢くしてくれます。どんな都市の間近であっても、天候次第では、大自然について、生命についてを、海ほど教えてくれる場を見つけるのは難しいほどです。

家や学校といった日々の営みの傍らで、もうひとつの雄大でゆったりとした時間の流れている海。そんな場を子どもたちが自分の心に取り込んでくれたなら、やがて大人になった時に大きな意味があると信じています。

また、概して海の直接的なつながりが多様化する一方で、地域に根ざしたコミュニティとの関わりが希薄になり、多様な海に関わる活動が存在しているものの、子どもたちがつながりを持つのは保護者が海への強い関心がある人等に限る傾向にあります。海と深いつながりのある土地で日々過ごす子どもたちが、海の恵みや厳しさを体験することを目的として「海のアフタースクール」を企画いたしました。

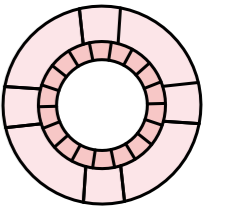
- 1) 海での様々な体験を通じて、海との関わり方や海に関わるコミュニティとの出会いの場、機会とする
- 2) 海を感じ、楽しむ経験と共にリスクをコントロールすることを知るきっかけとする
- 3) 放課後や長期休暇中における海に関わるモデルづくりとする

本事業にご協力下さった皆さま、ご参加下さった皆さまには心より感謝申し上げます。

また、本冊子を御覧いただくことで、興味感心をお持ちいただいたり、様々なご縁がつながることを願っております。

Water Safety

ウォーターセーフティー



7月23日(木) 湘南学園小学校プール

日々、生活の中でぼくたち、わたしたちは様々な形で水に触れています。全身を水に浸して遊ぶことを行う頻度が圧倒的に高まる季節が夏です。海での海水浴や波乗り、プールへ遊びに、川でザリガニ釣りやキャンプなどなど、実際に水に入らずとも水に近づくことは増えます。そしてまた、学校の周りに海、川、池と様々な水辺があるのが湘南学園です。「ウォーターセーフティー」は、水との関わりで大切なことは何かを気付かせてくれた素敵なプログラムでもありました。

最初は、プールの底に足で立って、カラダを頑として立てたままで表情の固かった子が、プログラムが終了するころには、水面で全身を広げてなんととも和やかに微笑むようになっていました。

カラダが水に浮くことは気持ちがいい。
それを全身で感じて、知ること。
それができれば、水中で自分の生命を守れること。
またそれが泳げるようになることの近道にもなること。

スイミングクラブでは、泳ぐことを教えても浮くことの重要性は伝えていないこともあるそうです。水の苦手な状態をカナヅチということがあります。頭とカラダが真っすぐに立っているの、そのまま沈んでいく状態です。まずはカラダが浮く事を、少しずつでも体験していくとカナヅチからは抜け出せることが分かります。立ったカラダの頭の後頭部を倒していきます。耳が水に浸されて、視線の先に空が広がるようになると腹が浮いてきます。

人間が何かを本当に理解するということは、頭と心と腹の3つが必要なのかもしれません。頭は「思考や理屈」であり、心は「気持ちや感情」であり、腹は「感覚」です。大人の場合は、物事への理解は頭から入りがちですが、子どもたちの場合は心と腹とい

えます。感情を解きほぐして、水に浮く感覚を得た時に、「腑に落ちて」まさに腹が感覚の中心となってきます。

風間さんが伝える言葉が、水の中にいる子どもたちが全身で感じる感覚と一致しているのでしょうか。水中でバランスを取らせながら、感覚を開かせていくまでのステップも絶妙でした。まずは、ビート板を抱きかかえながら水に浮かせて、次いで、わずかな浮力しか持たないペットボトルでも十分に浮くんだという安心感の持たせ方までとてもすっきりいくのです。上級生クラスでは、特に、手と腕の動きで揚力をつくる、スカーリングを行いました。カラダひとつだけでなく、ビート板にまたがることで、引き上げる力の感覚が繋がっていく様子が伝わってきます。

また、今回は学内のプールで行いましたが、海で安全に楽しく過ごす為のアドバイスもいただきました。

- ・海には、子どもたちだけでいかずに大人と一緒にライフセーバーのいる海水浴場へいくこと。
- ・ライフジャケット（PFD）を着用すれば、溺れることはない。特に、川では必ず着用すること。
- ・サーフィンを行う場合は、サーフィンを理解し、海に対処できる大人と一緒にいくこと。
- ・水面で漂流してしまった場合は、浮いているものを見つけて利用する。着衣泳なども経験しておくとい。

海水は、淡水より浮力があり、カラダを浮かしやすいため、是非、海でも全身を浮かせることを行ってほしいとお話もありました。海で遊ぶだけでなく、水の事故や水害など、水にかかわる上での基本的な心構えを全身で確認させていただきました。



講師紹介

風間隆宏さんは、地元ライフセービングクラブであるNPO法人西浜サーフライフセービングクラブの副理事長であり、日本ライフセービング協会のインストラクターとしても活躍しています。市内各所の小中学校へ出張しての海の安全教室を毎年担当し、近隣のスイミングクラブの安全管理のサポート等、海や水に親しむこの地域にはなくてはならない存在の方です。

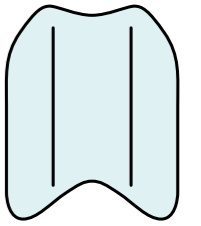
ウォーターセーフティーを学ぶには

- 西浜サーフライフセービングクラブ <http://www.nishihama.org/>
- パディ冒険団 <http://www.sports-buddy.jp/>
- 神奈川ライフセービング連盟 <http://lifesaving.ne.jp/>



Open Water Swimming

オープンウォータースイミング



8月25日(火) 湘南学園小学校プール

涼しい北風の吹く、小雨模様の天候となった当日。子どもたちが快適に水に入れるひとつの目安が気温と水温を足し算して50度を超えることといわれていますが、この日は水温、気温ともに24度。こんな時こそ、子どもたちの意欲を引き出しながら、水の中で楽しませるコーチの力量を見分けられる時はないのかもしれない。海であれば尚のこと、その時その場の状況でどう対応するかの判断が重要になってきますが、宮杉さんは、そうした経験を豊富に重ねてきています。

身体が冷えやすい状況では、出来るだけ動きを止めずに、適切なペースで様々な動きを盛り込んでいきます。プールサイドからの飛び込み、水の中では水面で泳ぎ、水中での潜水やデングリ返しや、逆立ち等々、空間を立体的に使い多様な身体を使い方をします。子どもたちが寒さを感じる隙を与えず、あきらむという気持ちを持たせず、かつ疲弊させることのない、抑揚ある乗りの良いリズムに乗せていきます。

水に慣れない子には、潜って水中では鼻から息をかく呼吸、プールサイドに捕まってバタ足、そして横への移動と、その子に適し

たメニューを個々に提供していきます。泳げる子には、四泳法はもちろん、海で周囲を確認しながら泳ぐようにヘッドアップ（顔上げて）を加えたりします。そうです、プールで泳ぐ分にはコースロープやラインでまっすぐ泳ぐことができますが、海では風、潮流、波、他の人からの影響など外部からの力を様々なに避けることを避けられません。プールで実施していても、海で泳ぐことを十分に意識させてくれるのです。プログラムを終えた子どもたちは、暖かいシャワーをゆっくりと浴びながら、「きつかったけど、楽しかったー」と笑顔に溢れていたのが印象的でした。

さて、オープンウォータースイミングは近年、各地でレースも増えた海などで行われる水泳レースです。こちらは今はオリンピック種目にもなっています。また、日本で古くから地域や学校で行われてきた海で泳ぐ集団泳として、遠泳があります。こちらは隊列を形作り、その列を崩さないように目的地まで一緒に泳ぐというものです。遠泳のサポート活動もされる宮杉さんとは、今後そのような機会を「海のアフタースクール」の中で作ればとも願っています。

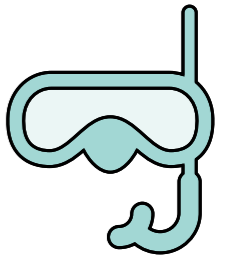
講師紹介

宮杉理沙さんは、子どもからシニアまで幅広い世代に、水泳やトラスロンなど多様な水との関わりを伝えられるコーチとし活躍しています。オープンウォータースイミングの元日本チャンピオンで、逗子から江ノ島にかけての湘南オープンウォータースイミングでも優勝経験をもっています。ライフセーバーでもあり海の泳ぎのスペシャリストです。

オープンウォータースイミングを学ぶには

日本水泳連盟オープンウォータースイミング委員会
<http://www.swim.or.jp/>
※講習会などは主に16歳以上のものが中心です。保護者の方へのおすすめとして情報を掲載いたします。また、小学生にはウォーターセーフティーやライフセービングを先に経験することを推奨します。





7月31日(金) 鎌倉市・材木座海岸

夏真っ盛りの材木座海岸へ。

この時期は昼近くなると決まって吹き出す海風（サーマルウインド）によって、遠浅の水の中もかき混ぜられはじめています。水中世界を楽しみにワクワクしながらやって来た子どもたちが、裸足で歩けないほどに砂浜も熱くなっていました。マスクとシュノーケル、それにフィンというシンプルな道具があれば、日常とは違う水の中の世界をかいま見ることができるシュノーケリングですが、使用中の事故もまた少なくありません。

道具の正しい使い方をマスターすることはもちろんですが、それ以前に海的环境や条件、対応できる同伴者が大切です。シュノーケルする海域や、その時の海の状況は適切かどうか。また子どもをサポートする同伴者の大人の力量や経験。そうしたことを全て加味しクリアした上で、シュノーケルを行う準備が整ったといえます。

まず、子どもたち同士でお互いでサポートし、安全意識を高める合う目的で二人一組のパディを組みます。海に入る前にはそれぞれの装備の確認です。ウエットスーツは、防寒や浮力の助けになり、クラゲやチンクイから身を守る保護もしてくれます。シュノーケルやマスク、フィンが揃っていることを指で確認します。次に使い方です。マスクは、曇らないように、

曇り止めに塗っておくといいですが、途中曇っても自分でマスクをクリアにできることが大事です。シュノーケルの使い方は重要です。水中で水を飲んでしまい、パニックしてしまうことは事故の要因にもなります。

1人の先生に4人の子どもたちでひとつのグループとなり、波打ち際から、海へ。子どもたちは水中世界にすっかり夢中、時間がいくらあっても足りない様子です。この日は海水がにごっていて決して条件がよかったわけではありませんが、海藻、ヤドカリ、ヒトデが、見られました。ただ水の中に浸っているだけで楽しいという様子でもありました。

海中世界に名残惜しそうな子どもたちでしたが、ウエットスーツを脱いだ子どもたちをタープの下に集めて松本さんが世界各地の海を潜って撮影した写真とともにお話をして下さいました。

世界中の海は、つながっています。七つの海といいますが、ひとつなんですね。ですが、その場その時にしか出会うことのできない奇跡的な場でもあります。同じ相模湾の葉山や伊豆でも海の様子はまったく違ってくるのが不思議なのか、ますます興味をかきたてられているようでした。

講師紹介

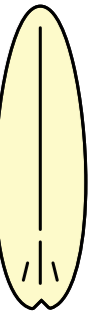
松本行宏さんは、ダイビングインストラクターとして国内や世界様々な海で潜ってこられました。藤沢の「パパラギ」で、NPO法人「海と自然の教室」の先生として活躍されています。

シュノーケリングを学ぶには

海と自然の教室 <http://www.umino-npo.com/>
※対象が小学4年生となっております。



Program.04
Surfing I
サーフィンI



7月28日(火) 藤沢市・鵜沼海岸

ハワイ諸島で発生したハリケーンが西へと向かい日付変更線を越えてきて台風13号が九州に上陸後に熱帯低気圧に変わった翌日。太平洋沿岸にもまだその余波が残ってかのように、鵜沼海岸にもウネリが届いて、ショアブレイク（岸近くでいっぺんに崩れる）気味に波が崩れていました。

この日を、待ちわびた子どもたちも、その海を目の当たりにすると、「わー波が大きい!」「こわいなー」と素直な言葉を口にします。

ライフセーバーの皆さんに挨拶をし準備運動を済ませて、まずは水慣れ。サーフボードという浮力体を扱う前に、身体ひとつで海の様子を確認する大事なステップでもあります。この時点では、寄せる波にもまれて喜ぶ子もいれば、慣れない波に戸惑う様子の子もいました。それぞれのペースや感覚を尊重して無理をさせないこと。沖に出て岸に戻る時には、波が少し前のタイミングに合わせて泳ぐと、身体ひとつで波に乗るポディーサーフィンをすることができます。力のある波に押されて、岸までぐんぐん乗って、顔を上げて子どものやったぜといわんばかりに瞳が輝きます。さて、村川新（あらた）さんのサーフショップから運んできた

サーフボードを使えるとなると、子どもたちは一目散に海へ向かおうとします。

あえてその勢いを止めることなく、安全のために必要な情報など話しは最低限に止めました。唯一しっかり伝えたことは、皆が入ったエリアの西側（引地川側）に離岸流（リップカレント）があったので、そちらには行かないことでした。あとは実際に子どもたちがそれぞれに海へ向かい身体での重ねる経験に合わせてサポートしていきます。

ゆったりと崩れる波のほうがサーフボードでサーフィンしやすいのに対して、この日の速く崩れていく波は簡単ではありませんでした。サーフボードの上に立つ事ができなくとも、波のエネルギーを全身で感じて、岸まで波に乗っては、また沖へ戻る光景がくり返されていました。その中には最初は波に対しておっかなびっくりで怖がっていた子の姿もあり、すっかり順応して、楽しんでいました。

「一番のサーファーは、最もサーフィンを楽しんだ人だ」まさに多くの子ども達がそれを体現していました。

講師紹介

村川新さんは、学生時代から鵜沼海岸でライフセーバーとして海にかかわり、その後、ロングボードのプロとして活躍しながら、サーフショップをオープンしました。地域やコミュニティの老若男女様々な人々からの信頼も厚く得ています。

サーフィンを体験するには

シェアサーフルーム <http://share-surf-room.com/>



Surfing 2

サーフィン 2



8月31日(月) 藤沢市・鵜沼海岸

8月最終日であり、夏休みも最後の日。

涼しい北よりの風と曇り時折雨も降る天気ももう1週間ほど続き、厳しい夏の暑さが懐かしく感じられるようでもありました。子どもたちと到着した鵜沼海岸は、海の家の人やライフセーバーの人影が見えるくらいで、もの静かな海が広がっていました。

幸運であったのは、風が止り、小さなウネリがとても形のいい波となって崩れていました。前回に引き続き、サーフィンをサポートして下さる村川新さんと話しながら、子どもたちも海への意識が盛り上がっていきます。準備体操を行いながら、海をよく観察します。

波の形のよい場所はどのあたりであるか。流れなどはないか。粒子の細かな砂で形成される底は、動くことはありません。それでも大まかには浅い部分と深い部分の底部のバランスによって波の崩れかたに傾向をつかむところを見る事ができます。深いところでは波は崩れずに、底が浅いところで波は崩れていきます。そんなことは頭だけの情報でなく、海に入り経験を重ねながら、自分のものとなるものです。

ゆったりと崩れていく波に合わせてボードを滑らせて、波の力に身を委ねながら、岸辺までずっと乗っていきます。最初は腹這いで、積極的な子はどンドン立とうとしていきます。そして、やがて上手に立って乗っている子の姿も増えていきました。姿勢よく立っている子もいれば、足を開き重心を落して身を

屈めている子も、それぞれです。

どんよりと静かな海の中に、子どもたちの笑顔が広がります。本当にこの日は幸運でした。

その場、その時でしか、知ることのできないことが、二つも経験できたのです。

ひとつは、天気がよくないからと辞していれば、この時の波の素晴らしさを経験できなかったでしょう。それから、もうひとつ子どもたちは贈り物のような出会いをいただけたのです。

灰色にそまった海と空の境界よりもずっと近いところで、何か黒っぽい大きな背びれのようなものが弧を描くように見えた瞬間がありました。

「あれ、イルカかな？」

岸辺から200メートル程の沖を江ノ島方向から辻堂方向へと、一頭のイルカが時どき顔や背びれから尾っぽまでを水面に上げながら移動していく姿が見られました。

新さんは、ここ25年程はほぼ毎日のように鵜沼海岸を見ていますが、イルカが陸からこんな近くを行き来する光景は見た事がなかったそうです。

慌ただしい人間の世界とは違う、ゆったりとした大きな時間が流れる自然の世界があること。

そんな世界に触れる時間が、子どもたちの日々の生活の中にもっとあったならなと願わずにいられません。



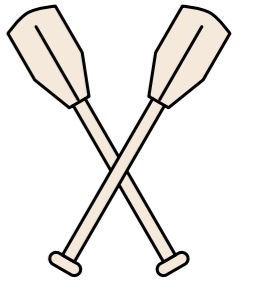
片瀬西浜海水浴場／鵜沼海水浴場について

例年7-8月の2ヶ月間は、海水浴期間のためにサーフボードの利用、持込みは規制されています。(朝8時から夕方5時の間)
ただし、その制限の中でも波に乗る楽しさを重ねることはいくらかでもあります。例えば、ボディサーフィンを行ったり、ボディボードを行うことなどもできますね。



Outrigger Canoe

アウトリガーカヌー



8月7日(金) 藤沢市・江ノ島西浦

典型的な夏の日の昼下がりでした。気温が上がり始める10時過ぎから南よりの風がそよそよと吹き出し、昼頃にはしっかりとサーマルウインド（気温上昇による海風）が海面をざわつかせていました。

夏の真っ盛りとあり、江ノ島への橋も海水浴と合わせて訪れている人々で賑わいます。混雑を抜けながら、江島神社の参道を通り、岩本楼本館の手前の小さな路地を入ります。さらに少し歩いて正面に海が開けてくるところ、その浜辺が西浦です。

今でこそ、知る人ぞ知る西浦ですが、元々は江ノ島にあった唯一の漁港でした。その数百年続いていたであろう江ノ島の漁港としての看板が降ろされたのは、1964年の東京オリンピックでヨット競技のために江ノ島の東側に埋め立てられて、港湾が整備されてからのことです。

長らく地元の方々に愛され大事にされてきた西浦でしたが、漁港として活用されなくなってからは、清掃が行き届かずゴミ溜まりのようになっていました。さらに境川の整備や、ここ最近では片瀬漁港もできて、海底の地形も変わってしまいました。砂が溜まりやすくなり、水深が浅くなっていました。そんな西浦に再び、光を当てたのが、地元の理解ある方との出会いから活動をはじめたカヌークラブの面々たちでした。毎週末の清掃活動、祭りに参加させていただいたり、地道な活動が実って、大きなカヌーが並ぶ浜へと変わりました。

講師紹介

小林俊さんは、子ども、大学生からシニアまで様々な世代の人々がクラブに所属湘南アウトリガーカヌークラブを運営。湘南学園の「海の学校」の講師でもお世話になっています。

長さ13メートルもある大きな6人乗りのアウトリガーカヌーが6艇並べられています。子どもたちがカヌーに乗るには、まずは水辺まで重たいカヌーを力を合わせて運びます。陸にあっても、海にあっても、カヌーを維持、存続させていくには、多くの人々の力がかけません。元々は、太平洋の島々で、移動や漁につかわれてきた「生きるための船」でもあるのです。

カヌーに乗って皆で力が合えば、カヌーの動きが変わるのが感じられるでしょう。子どもたちの表情がみるみる変わっていきます。皆で、心と力を合わせれば、波の力や風の力をより利用できること。そんなことがシンプルに共有できるのが、このアウトリガーカヌーの魅力なのかもしれません。

江ノ島の沖に出てパドルを止めて、カヌーから次々に子どもたちが水の中に飛び込んだりもしました。2艇のカヌーの間に抱かれるように、海を楽しむ子どもたち「楽しい」「気持ちいい」とポジティブな言葉ばかりが聞こえてきます。

その後のことです。水の中からカヌーに上がるのは、ひと苦労だったりするのですが、先に乗っている子が、水の中から引き上げる姿が見られました。アウトリガーカヌーと一緒に漕ぐことを通じて、ひとつになった子どもたちの姿に、未来への希望を重ねることが出来ます。

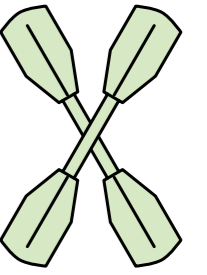
アウトリガーカヌーを体験するには

湘南アウトリガーカヌークラブ
<http://www.shonanoutrigger.com/>
週末に小学生対象の江ノ島オーシャンキッズも実施しています。



Sea kayak

シーカヤック



8月25日(火) 藤沢市・片瀬(境川)

いつ雨が降ってもおかしくない曇り空に、北よりの風が川面の上を吹き抜けています。

計画では、川から海まで出て、江ノ島への橋をめぐり東浜へ上陸して戻ってくる予定でした。上流部が北にあり、下流にかけて南に向かう境川の流れに加えて、強い北風が加われば、カヤックを川面浮かべれば海まで簡単に出て行ってしまいます。しかし、その反面下流から上流に漕いで上がることは困難になってきます。

講師の遠藤さんからのご自宅からも遠くない西浜橋のそばにある漁船のスロープと倉庫が、境川の拠点となっています。まず皆で、カヤックやパドルといった道具と、身につけるライフジャケット(PFD)という装備の準備です。カヤックは、シットオン・カヤックといい、艇そのものが安定した浮力体となり、その上に座って漕ぐものです。身体を中心軸を意識しながら背中や上半身全体を使いながら漕ぐことをレクチャーしてくれました。いざ出陣です。

上級生から下級生の縦割り3人一組のチームで1艇のカヌーに乗船して、タイミングを合わせて、ゆっくりと水をつかんでいきます。水面に浮かぶカヤックを、漕ぐ人の動きによって、真つすぐいくこともあれば、減速することも、回転することもできます。ただし、摩擦の無い水面では、地面の上のようにピタリと止まることはできないことを、子どもたちは身体で確認していきます。「あれ、まがっちゃようよー」「パドルがバラバラだからだよー」等々。遠藤さんのわずかな話をヒントに、水面に出てからは

子どもたちは自らどんどん課題を見つけて、全身で自分のものにしていくのです。

山本橋をめぐり、両脇に係留される船の間を抜けるながら大きく川にそって曲がっていきます。すると正面には、歩行者が行き来する弁天橋、その奥に国道134号線が通り片瀬橋が重なります。「がんばってねー」小さな子どもたちがカヤックを漕ぐ子どもたちを見つけて橋の上から手を振ってきます。川から見る風景は、陸から見えるものと違ったものがあり陸から見てもまた、川に人がいる風景もまた良いものなのかもしれません。

片瀬橋をめぐり、目の前にどんと江ノ島を確認したところで、今回はUターンです。

さて、カヤックの向きを上流へと向けると、子どもたちがさっきまで気にせずいられた風に向き合うことになります。下る時とは異なる、カヤックの進み具合に、子どもたちは困惑しながらも、力を入れて奮闘していきます。5艇のうち1艇どうしても遅れてしまったカヤックは、遠藤さんがロープで牽引してくれました。

全員無事に出発地点のスロープまで戻り、ほっとした子どもいれば、中には、ひとつだけ出ていたSUP(スタンドアップパドルボード)に乗ってみたいと水辺から離れない子もいました。今回のような川や水辺で子どもたちが活動できる機会を、日々当たり前前にはしたいと考えている遠藤さんの想いが実現される日はきっと遠くないはずですよ。

講師紹介

遠藤恵子さんは、地元鶴沼育ちで水に親しみながら成長し日本代表選手としてバルセロナ、アトランタと二度オリンピックにも出場し現在は、旦那さまとパディ冒険団を運営している。

シーカヤックを体験するには

パディ冒険団 <http://www.sports-buddy.jp/>





8月3日(月) 横須賀市・秋谷

鶴沼海岸からは電車を乗り継ぎバスを利用してやってきて、久留和海岸に降り立った子どもたちを真夏の太陽が容赦なく照りつけます。バス停に迎えに来てくれたマイケルさんに連れられて、しばらくは登りの坂道が続きます。アスファルトの道は熱く焼けバックパックを背負った子どもたちの足取りは重く「まだ?」「もう無理」と弱音も聞こえてきます。

10分たったところの木陰で休憩をとり水分補給。さらにそこから10分歩くとアスファルトが途切れ、緑に囲まれた土がむき出しの林道に入っていきます。「森に囲まれた道は涼しいでしょう」空気の变化を子どもたちも肌で感じているようでした。

畑に到着すると、マイケルさんが子どもたちにレモンバームを配ってくれました。「天然の虫除けだよ」様々な種類の植物が植えられている畑を見ながら、さらに坂を上がり、お手製の小屋の前に立つと、見渡す限りは森の緑に覆われた山と遠くに水面が光る海が広がっています。

世界の素晴らしさと美しさを感じることで、誰にとっても気持ちの良い場所です。子どもたちの疲れもすっかり吹き飛ばされたかのような表情で見えていました。

カボチャ、トウモロコシ、大豆と種類の異なるものをお互いの相性を考えてあえて混合して植えているエリア。ミツバチの巣箱や椎茸の原木、それに、苗作りの温室や肥料づくりの床、などなど。古くから畑として利用されてきた土地の担い手がいなくなって数年放置されていたところにマイケルさんが出会い、仲間と数人でこの畑を再生させてきたそうです。

講師紹介

マイケル・キダ (Michael Keida) さんは農家としてのチャレンジをしつつ、子どもたちの体験活動の場づくりも行っている。TVのレポーターやモデルとしても活躍中。

「海と山はつながっています。この土地の肥料は、海で拾ってきたたくさんの海藻を使っています」と、見せてくれたバケツには海藻を発酵させて肥料にしたものが入っていました。

子どもたちは、小さな耕耘機を使い土を耕しオクラの種を植えさせてもらいました。

木陰のデッキで涼みながら昼食です。畑で取れたての野菜たちをマイケルさんが集めたサラダは、とっても美味です。

野菜が苦手な子もこんな時には、口にしてみようという気持ちになるものですね。「ちょっと美味しいかも」なんて遠慮がちにいいながら。昼食と休憩の時間が終わると、お世話になった畑を後にして、山と海をつなぐ川へ。

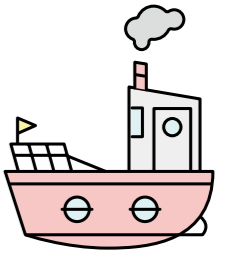
飲むことのできる水も湧いている小川の水は、澄んで気持ち良さそうです。足を入れただけでもヒンヤリと全身に冷たさが伝わってきます。子どもたちはみんな水着になり、探検したり、堰で水を浴びたりしました。

子どもたちの姿を見ながら哲学者の鶴見俊輔さんの言葉を思い出しました。「日本人の学びの原点は、山野を跋涉(ぼっしょう)することにある」と。(※跋涉とは、山や野に入り、水を越えるという意味だそうです)ふたつ、みつ世代の前までは、人々の営みの中に、自然の土や水に触れる機会がありました。

山にいても、海にいても、そこには務めをする大人たちの姿があり、子どもたちはその傍らで手伝いやら遊びを見いだしていたのでしょう。

そんな里山里海のつながりが体感できた一日でした。





8月28日(金) 藤沢市・片瀬漁港

片瀬江ノ島駅から子どもたちの足でも5分ほどで片瀬漁港に到着すると、接岸している「でいと丸」の北村さん、山下さんが迎えてくださいました。

曇り空で、ならい（漁師の言葉で北東風の意味）の吹く朝でしたが、子どもたちのテンションは最高潮です。

ご挨拶の後、ライフジャケットの着用や船の運航時には立ち歩かない等の説明を聞いた後に乗船です。釣り竿が用意された席に座ると次いで、竿を使用の説明を受けて、いよいよ船は動き出します。あっという間に江ノ島のはるか沖へ。「魚の群れを探しています」というアナウンスが船長の北村さんから聞こえてきます。

まずここで練習がてらやってみましょう、といった場所では誰もあたりがはずにすぐに移動しました。

この日は、天候も悪かったために、他に釣り船がでておらず情報交換もできなかったそうです。

次のポイントまで移動して竿を下ろすと、2、3人の子がアジやサバを釣り上げました。

その後、ぱたりと当たりが止んでしまうと次のポイントを目指して、烏帽子岩の沖へと向かいました。

その海域では何隻かの船が、キハダマグロを狙っているとの情報が北村さんには入っていました。

ならいの風は、ますます強く沖に向かって白波が立っています。やがて、沢山のカモメが舞う海域で船は減速していきました。

何やら水面には沢山の魚影でうごめいているようでもあります。その気配を察知したのか、子どもたちからも「ここは釣れそうだな」と声立ちます。

竿を垂らしていく子たちに、次々にあたりが来ました。サバ、ソーダガツオを中心に、ブリやずめだれ等も来ていました。水面にはイワシの群れが時々浮き上がり、それを追うようにサバなどが入ってきています。

さらにそうした中型の魚をおった鮫も姿を見せ、カモメも含めて、補食関係にある大海原の食物連鎖の世界の目の当たりし、その迫力をひしひしと感じていたようです。

本物の海の世界に触れさせていただき、子どもたち全員が持ち帰った魚を大事に食べました。

生命のつながりを感じられる大海原の中で、自分で釣り上げた魚の味は最高でしたね。



釣り教室について

江ノ島フィッシャーマンズ・プロジェクト

釣り教室を春から秋にかけて実施されています。

冬期は、ワカメの苗付けや収穫体験を親子向けに行っています。

<http://enoshimafp.web.fc2.com/index.html>



Seaword

さあ、海へ!そのために確認しておきたいこと

1. 自分の能力を把握して



体調が悪い時に無理をしないことは、もとより海をよく観察して自分が対処できるかどうかを身体感覚と合わせて判断していく。また、自分の能力が拡大すれば、動ける範囲や対応できることも増えることを重ねていく。

3. 場所の選び方



海水浴期間であれば海水浴場で、泳ぐことなどができる。また、サーフィンやシュノーケリングは、適切な場所で行えるよう、熟知した人の基でまずは経験を重ねること。その上で、その場にある様々なリスクを把握できるようにしていく。

5. 海の潮汐、波、風



生きている海の動きを知ることが大事。潮の満ち引きは、潮見表を確認すれば目安がつく。潮の動きや風の強弱、方角の変化によって、波も変わる。五感全てをつかい、海を観察して、感じることを。

7. 溺れている人を見つけたら



118番(海上保安庁)または119番(救急)に通報。近くにライフセーバー、サーファー等で助けられる人がいれば呼ぶ。身体ひとつで助けることは大きなリスクをとまうので行わない。

2. 天候などの判断



それぞれの天候下でどんなリスクがあるか把握すること。また、天気予報などで事前に情報収集しつつも、その時その場での変化に敏感になるようにする。その時には問題がなくとも、その先に様々なことが予想されることは楽観視せずに、回避する姿勢が大事である。

4. 道具の準備等について



行動に必要な準備を備えること。また、マニュアルにあるような具体的なモノに頼らずとも、その背景にある意味を理解すれば必要か不要かの判断もできる。水辺では、正しくライフジャケット(PFD)を着用していれば溺れることを防ぐことができる。ただし、着用したまま泳ぎ等を習得することはできない。

6. クラゲなど



クラゲ、チンクイ等は、自分に合った対処法を知ること。クラゲの場合は、肌に毒が付着しているので、かかないこと。かくと毛穴から身体の中に入るので、まずは海水で十分にすすぐこと。エイやゴンズイ等が刺さった場合は、病院で診てもらおうこと。

8. 海とのかかわりをもとう



海での、小さな失敗は自分を成長させてくれるが、大きな失敗は生命の危機を招く。まずは無理をせずに、好きなかたちで海とのかかわり、出来るチャレンジを繰り返そう。

おわりに

本年、無事に「海のアフタースクール」を実施、終了できたことを関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

風間隆宏様(西浜サーフライフセービングクラブ)

宮杉理紗様(e3fit)

松本行宏様(ババラギ/海と自然の学校)

村川新様(Share Surf Room)

小林俊様(湘南アウトリガーカヌークラブ)

遠藤恵子様(パディ冒険団)

マイケル・キダ様(Organic Geeks)

北村治之様(でいとう丸)

山下由香里様(江ノ島フィッシャーメンズプロジェクト)

学校法人湘南学園小学校

発刊:2015年11月

湘南学園小学校アフタースクール

(特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール)